

アメリカ黒人女性の奴隷体験

—— ブラック・フェミニズムの源流を探して⁽¹⁾ ——

大 橋 稔

はじめに

従来ブラック・フェミニズムは、1960年代にはじまる第二派フェミニズムの影響を受けて登場したと説明され、また第二派フェミニズムは、50年代にはじまるアメリカ黒人⁽²⁾の公民権運動の影響を受けて登場したと説明されてきた。しかしこのような見解は、白人中心の西欧フェミニズムに内在する人種差別の結果もたらされたものであることを鄭映恵は指摘している⁽³⁾。50年代にはじまる公民権運動は、ローザ・パークス（Rosa Parks: 1913～）など多くの黒人女性の努力によってはじめられた運動である。フェミニズムとは常に公民権の獲得を要求する社会運動である／あったとする鄭は、パークスが逮捕され、公民権運動がはじまった1955年12月に第二派フェミニズムがはじまったとすべきであると主張している。彼女の主張に従うのであれば、ブラック・フェミニズムの源流もまたパークスの逮捕に求めることが出来ると考えられる。

また筆者は拙稿において、アリス・ウォーカー（Alice Walker: 1944～）やハワード・ジン（Howard Zinn: 1922～）の歴史観に基づきながら、公民権運動の母（the Mother of the Modern-Day Civil Rights Movement）と呼ばれているパークスの歴史的評価に再考を加え、彼女の55年12月の行動はウーマニズム⁽⁴⁾の系譜において位置づけられるべきであり、それ以前の多くのアメリカ黒人女性の闘争を受け継いだものであることを明らかにした。その結果

彼女は「公民権運動の母」であるものの、唯一絶対の母ではなく、「公民権運動の母たちの一人」であり、「黒人女性解放運動の娘たちの一人」であることを明らかにした⁽⁵⁾。

一方岩本裕子は、1904年から07年の間に発行されていた雑誌『黒人の声』(*Voice of the Negro*)に掲載されている黒人女性の主張の分析を通じて、20世紀初頭にはすでにブラック・フェミニズムの萌芽が見出せることを指摘している⁽⁶⁾。さらにはハリエット・タブマン (Harriet Ross Tubman: 1821?~1913)⁽⁷⁾ やソジャーナー・トルース (Sojourner Truth: 1799?~1883)⁽⁸⁾ の存在や闘いに言及し、ブラック・フェミニズムの源流を奴隷制時代に見出せる可能性があることを示唆している。しかし岩本は、奴隷制時代はまだ黒人女性が「声高に発言できる時期ではなかった」⁽⁹⁾ として、ブラック・フェミニズムの源流は19世紀末から20世紀初頭にあったと結論付けている。

しかしフェミニズムとは、周囲の状況、環境によって規定されるものではなく、女性や周縁化された存在が、不平等・不利益な関係性から脱却するための運動であり、奪われた〈声〉を取り戻すための運動である。このように考えるのであれば、ブラック・フェミニズムの源流を、公民権運動や20世紀転換期以前に求めることは可能であるように思われる。よって本稿では、女性奴隷が記した奴隷体験記に描かれた彼女たちの生き方の分析を通じて、ブラック・フェミニズムの源流を奴隷制時代に求めることが出来るかどうかを検証することにする。

合衆国における奴隷制時代、黒人奴隷たちは読み書き教育を受けることが禁じられていた。しかしそれでもなお多くの逃亡した元奴隷たちは、自らの経験を自らの手によって記し⁽¹⁰⁾、あるいは白人などの協力を得て語りの聞き書きを作成し、奴隷制下にあった自分や、未だに奴隷という境遇に苦しむ黒人たちがどのような状況にあるのかを世に知らせてきた。これらの奴隷体験記の中には、フレデリック・ダグラス (Frederick Douglass: 1817?~1895)⁽¹¹⁾ やブッカー・T・ワシントン (Booker Taliaferro Washington: 1859~1951)⁽¹²⁾ などの奴隷体験記のように今でも読み継がれているものもある。

当然そのような奴隷体験記の中には、黒人女性奴隷による奴隷体験記も含まれている。女性奴隷による体験記は、男性奴隷による体験記同様に、奴隷としての苦しみなどを伝え、如何にして自由を手にしたのかを伝えている。しかしその一方で、彼女たちが女性というジェンダー化された存在であるがゆえにこうむることになった体験についても描かれている。例えば〈性奴隷〉として扱われること、あるいはそのようにみなされることに関する苦しみや、〈母〉という役割ゆえの体験などが描かれてもいる⁽¹³⁾。

本稿では、女性奴隷の奴隷体験記をもとに、彼女たちがどのようにして奴隷制を生き抜いたのかを考察することを通じて、彼女たちにとって奴隷制とは如何なるものであったかを明らかにし、彼女たちが奴隷制とどのように闘ったのかを明らかにする。また女性奴隷たちの奴隷制との闘いが、アメリカ黒人女性史においてどのような意味を有していたのかを分析することを通じて、ブラック・フェミニズムの源流が奴隷体験や奴隷制との闘いの中にあったことを明らかにしたい。

I 黒人女性奴隷と奴隷体験

まず奴隷とはどのような境遇にあったのかを概観することにする。奴隷制に関する研究を行ったオルランド・パターソン (Orland Patterson: 1940～) は奴隷という存在を、「奴隷とは生まれながらに疎外され、全体として名誉を喪失した人間が永続的かつ暴力的に支配されるということである」⁽¹⁴⁾ と定義している。合衆国では奴隷の母から生まれた子どもはすべて奴隷とされていた。つまり奴隷とは生まれながらに社会的な権利が剥奪され、人間でありながら人間としては扱われることのない、運命を暴力的に支配された存在だったのである。

そして奴隷たちを直接的に支配していたのは、所有者である彼／女たちの主人であった。その支配者が奴隷をどのようにみなしていたのかを、ハリエット・ジェイコブズ (Harriet Ann Jacobs: 1813～1897) は自伝⁽¹⁵⁾ で次のように端的に示している。「奴隷所有者たちの目から見れば、これら人間の姿をした機

械（＝奴隷）は、彼らの植える綿や飼育する馬以上のものではありませんのである」⁽¹⁶⁾。

また主人にとって奴隷は、ペット以下の存在であったことをジェイコブズは記している。彼女と共に奴隷とされていた料理係は、あるとき主人のペットの犬用の食事を作ることを命じられた。しかしその餌を食べた犬は死んでしまった。主人は犬が死んだのは、料理係がきちんと調理しなかったためであると責め、その餌を主人の前で食べるよう命じた。その主人にとって奴隷の胃袋は、自分のペットである犬の胃袋よりも頑丈に思えたのである。その結果料理係は、犬と同じように苦しまなければならなくなった。そしてその後も「主人夫妻の数々の残虐行為を耐え忍ばなければならなかった」⁽¹⁷⁾のである。

クラフト夫妻による奴隷体験記⁽¹⁸⁾でもまた、奴隷は主人にとってはただの財産である以外、何ものでもなかったことが記されている。奴隷が人間としてではなく奴隷主の財産として扱われるのは、決して私的なことなのではなく、サウス・カロライナやルイジアナなどでは州の法律によって規定されていた。このことはクラフト夫妻が生まれ育ったジョージアでも変わりはなかった。夫ウィリアム（William Craft: 1824～1900）は主人の命令で、家具職人としての能力を身に付けるための教育を受けている。しかしこれは、奴隷が自立するためになされた教育なのではなく、付加価値のある奴隷のほうが、付加価値のない奴隷よりも高く売れるためになされた教育であった。つまりこの教育は財産としての奴隷の価値を高めるためだけになされた教育だったのであり、ウィリアムは主人にとって動産に過ぎなかったのである。実際ウィリアムは、主人が急遽資金を調達しなければならなくなったとき、家具職人としての教育を受けている途中であるにも関わらず売りに出されてしまっている⁽¹⁹⁾。

このように奴隷の境遇は、主人の掌中にあった。この点をジェイコブズは、一年契約でほかの農園などに貸し出されている奴隷の様子を紹介しながら次のように記している。

その日に、誰が奴隷に十分な衣類や食べ物を与えているのかは簡単に分か

る。というのも、その人間は、大勢の奴隷の群れに取り囲まれて、次のように懇願されているからである。「お願いです、旦那さま、今年はおらを雇ってください。おら本当に一所懸命働きますよ、旦那さま」⁽²⁰⁾

この契約は1月1日に交わされるのが通例であったようだが、この契約を誰と交わすかによって、契約奴隷の一年間の暮らしは大きく変わってしまうのであった。だからこの奴隷たちは、誰が良い主人であるかをよく知っており、少しでも良い主人のもとで働くことを望んでいたのである。

主人によって奴隷の境遇が変わってしまうのは、決して一年契約で貸し出される奴隷ばかりではなかった。財産に過ぎない奴隷たちは、主人の経済状態などによって売買の対象とされ、売買によって主人が変わるということはめずらしいことではなかった。ジェイコブズは何度か売買されているし、クラフト夫妻の場合もそうであった。またソジャーナー・トルースも何度も売買の対象とされていた。そして彼女たちの体験記によると、売買されるたびに彼女たちが置かれる状況はより劣悪なものとなっていた。

また奴隷制とは、奴隷の家族を強制的に切り離すシステムでもあった。トルースには10人から12人の兄弟姉妹がいたが、彼女が共に親元で過ごしたことを覚えているのは、弟のピーター（Peter）だけであった。彼女より年長の兄姉は、彼女が生まれる、あるいは記憶を残すことが出来るまでに成長する以前に、奴隷として売られてしまっていたのである。奴隷を財産として扱い、売買の対象とするこの制度が、後のトルースに悲しい出会いを経験させている。彼女は逃亡後、ナンシー（Nancy）という女性と出会った。彼女たちはさまざまなことを語り合うことを通じて、強い絆を感じ、精神的なシスターフッドを感じていた。ナンシーはまもなく死んでしまうのだが、彼女の死後兄姉と再会したトルースは、ナンシーもまた自身の姉であったことを知ることになる⁽²¹⁾。奴隷制は、偶然出会い、強い絆を感じた実の姉妹を、実の姉妹として再会させることを許さなかったのである。

しかし奴隷制が家族を強制的に断り離すシステムであるからこそ、奴隷たち

はより強い家族の絆を求め、大切にしていたのかもしれない。ジェイコブズの場合、弟のジョン（John S. Jacobs: 1815～1875）⁽²²⁾と共に奴隷として働くことが出来たため、辛いことや納得の出来ない事態に直面したときなどは、互いに励ましあいながら乗り越えていた。さらにジェイコブズ姉弟を精神的・物質的に支えていたのは祖母の存在であった。自由黒人であった彼女は、姉弟に食事を届けるなどして支えたのである。またトルースは競売にかけられ母親から切り離されたとき、母に言われた言葉を常に心に留め、神を信じ、主人に従順に服従していた。また彼女の父は、彼女が余りにも酷い扱いを受けていることを知ったとき、彼女が違う主人のもとで働くことが出来るよう尽力した。さらにハリエット・タブマンは、自らが逃亡して自由を手にした後も、危険を省みず幾度となく南部に潜入し、自身の親類縁者を含め 300 人もの奴隷を逃亡させている。

タブマンのように逃亡した奴隷が南部に舞い戻ることは危険な行為であったが、危険にさらされているのは、逃亡した奴隷や、主人に歯向かった奴隷ばかりではなかったことをクラフト夫妻は記している。ジョージアでは奴隷の生命は法律で守られることがなかった。一度奴隷とされたなら彼／女たちは、家やプランテーションの内外を問わず、いついかなるときであっても白人の命令に従わなければならなかった。また白人の命令に従わなければ奴隷を叩き殺してもよいことが法律で明文化されていた⁽²³⁾。また奴隷であっても自由黒人であっても黒人は自由に外出することは許されず、通行証を携帯しなければならなかった。通行証が不携帯であったり、提示を拒否したりした場合は、逮捕・罰金刑が課せられた。奴隷が罰金刑を課せられた場合、罰金は奴隷主が支払わなければならなかった⁽²⁴⁾。

また一般的に奴隷というと、アフリカから強制的に連行されてきた黒人、奴隷から生まれた子ども、年季奉公としてアメリカにやってきた契約期間中の白人などが思い出される。しかし実際には拉致や誘拐によって奴隷にされた白人、あるいは経済的理由から売りにだされることによって奴隷にされた白人の子どもたちも相当数存在していた。このことをクラフト夫妻はドイツ出身の姉妹の

例を通じて紹介している。

ダニエル・ミューラー (Daniel Muller) はアメリカに到着するとすぐに、二人の娘ドロシアとサロメ (Dorothea and Salomë Muller) を連れて、ジョン・ミラー (John F. Miller) のプランテーションで働き始めた。しかしダニエルはすぐに病気となり死んでしまう。母親は船旅の途中で死んでしまったため身寄りを無くした二人の娘は、ミラーによって奴隷としてロイス・ベルモント (Louis Belmonte) に売られてしまった⁽²⁵⁾。また8歳の時にオハイオの自宅から誘拐され、バージニアへ奴隷として売り飛ばされた白人の少年の例も紹介されている。彼は12歳の時に逃亡し、無事両親と再会を果たしている⁽²⁶⁾。クラフト夫妻は、このような事例を紹介しながら、合衆国において奴隷制とは、人種や肌の色だけの問題なのではなく、誰もがその犠牲者となる可能性があることを示しているのである。

ジェイコブズ、クラフト、トルースは共に、奴隷制から逃亡し、自由を手にした元奴隷であるが、彼女たちは最初から奴隷制が自らを苦しめている元凶であるとは考えていなかった。トルースの場合、「白人どものクロンボ (white folks' nigger)」⁽²⁷⁾と奴隷仲間から呼ばれるほどに主人に尽くす奴隷であった。それは彼女が「奴隷制は正当で名誉あるものだ」と強く信じていた⁽²⁸⁾ためであった。エレン・クラフト (Ellen Craft: 1826~1891)⁽²⁹⁾の場合は、女主人が「彼女の階級の大多数に比べて、明らかに思いやりのある」⁽³⁰⁾人物であったためか、彼女自身のつらい奴隷体験についてはほとんど語らず、彼女を批判することも語っていない。むしろ彼女は、女主人を信頼していたようである。またジェイコブズにいたっては、6歳までは自分が奴隷であることすら知らずに育ち、12歳になるまでは奴隷としての苦しみを体験することはなかった。彼女たちのこのような、奴隷制や主人への信頼という経験が、主人が変わるごとに劣悪な環境となっていく過程の中で、奴隷であることの不条理を痛烈に実感させ、逃亡、奴隷制批判へと導いたのではないだろうか。

II 黒人女性奴隷と性奴隷体験

ジェイコブズは、性奴隷⁽³¹⁾とされていたことを直接的に語りはしないが、主人から性奴隷とみなされていたことは明らかである。主人は屋内奴隷であった彼女を性的快楽のための道具として利用するため、さまざまな策略をめぐらす。常に彼女を監視し、機会があるごとに性的な発言を浴びせかけ、快楽の道具となることを要求した。彼女が身体的に性的な対象となるような年頃に達すると、主人の攻撃は一段と激しさを増した。

私はいまや十五歳となり、奴隷の少女としては、生涯の悲しい時期にさしかかっていた。主人が、耳元でけがらわしい言葉を囁き始めたのだ。私は若かったとはいえ、それらの言葉の意味を知らずにはすまされなかった。(中略)私は嫌悪と憎悪の念を抱きながら、彼のそばから離れていった。しかし、彼は私の主人だった。私は彼と同じ屋根の下に住むように強制されていた⁽³²⁾。

ジェイコブズには、大工をしている幼馴染の自由黒人の青年がいた。二人は次第に愛し合うようになり、結婚を意識するようになつた。しかし主人は、彼女たちの結婚を認めようとはしなかった。それどころかさまざまな策略をめぐらし、二人の仲を引き裂こうとした。結局幼馴染との結婚を諦めた彼女だが、日がたつにつれ、さらに身の危険を痛感するようになる。そこで彼女は、主人からの性的攻撃から逃れるため、サミュエル・ソーヤー (Samuel Tredwell Sawyer: 1800?~65) という白人男性と性的な関係を持つことを決断する。そうすれば主人が彼女を性奴隷にするのを諦めるだろうと考えたのであった。結果彼女は妊娠し、主人の逆鱗に触れることになる。二人の子どもを産んだ彼女は、父親の名前を明かすことを拒んだため、農園奴隷とされてしまった。しかし主人は彼女を農園に追いやるとき、決してジェイコブズを売ったりはしない

と言って、これからも彼女に対する性的攻撃が続くだろうことを暗示したのである。

クラフト夫妻は、「たとえ父親がジョージアの知事であったとしても、赤ん坊が生まれたとき母親が奴隷であったならば、その哀れな子どもは母親と同じ悲しい運命となることが法的に決定されていた」⁽³³⁾ ことを紹介している。このような法律が存在したからこそ、奴隷主は女性奴隷を「子産みの道具」として利用し、財産を増やすことが出来たのである。

女性奴隷に子どもを生ませ、その子どもを奴隷として売買し、財産を増やすという行為は一般的に行われていた行為であった⁽³⁴⁾。奴隷主は自分の子どもを奴隷として合法的に売り払い、特に「忠実で、美しく、貞節な少女」であった場合、高額な値で売買されていた。そのような奴隷の少女に高値が付くのは、「最も忌まわしい目的のため」であった。美しく、貞節な奴隷の少女を購入した奴隷主は、「犯罪的な性行為」を少女に強制したのである。彼女たちは主人に従うしかなかった。主人の気まぐれな意思の方が、彼女たちの訴えよりも重視されることが法律で規定されていたのである。彼女たちがそのような状態から抜け出すためには、逃亡するかあるいは死ぬしか方法はなかったのである⁽³⁵⁾。

性奴隷にされた奴隷の末路は悲劇的であることが多い。なぜなら性処理の道具、快楽の道具でしかない彼女たちは、奴隷主が新たな若い〈道具〉を見つけたり、奴隷主にとって都合が悪くなったりした場合、お払い箱にされ、売り払われてしまうからだ。ジェイコブズはその実例としてある女性奴隷を紹介している。彼女に子どもが生まれたとき、夫は子どもの父親は主人じゃないのかと彼女を責めた。この夫に対し主人は鞭打ちの罰を与え、女性奴隷は「あまりにおしゃべりが過ぎた」⁽³⁶⁾ という理由で売り飛ばされてしまった。

また法的に奴隷主の財産であるという状況が、実際に愛情で結ばれた奴隷主と女性奴隷の関係を悲劇的な結末へと導くこともあった。クラフト夫妻は次のような出来事を紹介している。ある奴隷主が女性奴隷と実質的な夫婦関係を結び、ほとんど白人と変わらない外観をした子どもたちには教育も受けさせてい

た。ところがその奴隷主は突然に殺されてしまう。残された母子たちは主人の財産は当然、家族として暮らしていた自分たちのものとなると考え、自由州へ移り住もうと考えた。しかし裁判所は、母子たちが財産を相続し有することも、自由の身となることも認めず、ほかの財産同様に母子たちも財産として奴隷主の親族に分配してしまったのである。そして子どもたちは競売にかけられ、家族は離散させられることになってしまった。この女性奴隷とは、エレンの叔母であった⁽³⁷⁾。

女性奴隷が奴隷主から性奴隷として扱われたり、みなされたりすることでこうむる苦しみは、奴隷主からの性的攻撃だけではなかった。女主人（＝奴隷主の妻）から嫉妬と憎悪の対象とされることもまた、性奴隷として扱われるがゆえの苦しみであった。主人から性奴隷として扱われそうになっていたジェイコブズは、ほかの屋内奴隷が女主人から受けているような、優しさや信頼を期待することは出来なかった。それどころか彼女は、女主人から向けられる嫉妬のまなざし、あるいは直接的な攻撃によって生命の危機にすら晒されていた。例えば彼女が夜中に目を覚ましたとき、嫉妬に狂った女主人が自分の上に覆い被さっていたときの恐怖を記している⁽³⁸⁾。また彼女は別の性奴隷とされた女性が、ほとんど白人のような子どもを産み、死の床についていたとき、「悪鬼さながらに」女主人が、「お前には、当然の報いだ。もっと苦しむがいい」⁽³⁹⁾と罵っていたことを紹介している。このように性奴隷とされた、あるいはみなされた女性奴隷には、奴隷主からの性的攻撃のほかにも、女主人からは憎悪の対象とされるという二重の苦しみが存在していたのである。

自分の性奴隷体験を誰かに話すこと、それは彼女たちにとって危険な行為であった。ジェイコブズは主人から、「静かに黙っていなければ、私（＝ジェイコブズ）を殺すと断言」⁽⁴⁰⁾されていたのである。また彼女は彼女たち姉弟を精神的に支えてくれていた祖母に対しても、彼女の体験や苦しみ話を話してはいない。それは祖母が性の問題に特に厳格であったため、祖母の怒りをかうことを恐れ、「誇りと恐怖の両方から」⁽⁴¹⁾彼女は沈黙したのであった。自ら奴隷として生きた経験のある祖母が、奴隷制のもとにある少女には性的な安全が保障さ

れるはずがなく、常に性的な危険にさらされていることを知らないはずがなかった。それにも関わらず祖母が性に関して厳格であったのには、ヴィクトリア朝時代の「お上品な伝統」としての貞操概念が大きく影響していた。祖母は自由黒人として、人間としての誇りを持って生きている人物であった。そのために祖母は、〈人間の価値観〉としての貞操概念を厳格に追及していたのである。

しかしこの厳格な貞操概念は、白人女性のみ適用されたものでしかなく、女性奴隷に適用される概念ではなかった。家畜や道具としてしか扱われない女性奴隷に、人間の価値観である貞操概念が適用されるはずがなかったのである。だからジェイコブズは読者に向かって、「奴隷女性を他の女性（＝白人女性）と同じ基準で裁断してはいけなく感じています」⁽⁴²⁾と訴えなければならなかったのである。性奴隷の被害者である彼女は、奴隷制のもとで人間としての尊厳を求めて生きた祖母を悲しませたくないために、自分の苦悩を話し、助けを求めるのではなく、沈黙しなければならなかったのである。

Ⅲ 黒人女性奴隷と逃亡

以上見てきたように黒人女性奴隷には、奴隷としての苦難のほかにも、性奴隷とされる／みなされるという女性であるがゆえに耐えなければならない苦難が課せられることもあった。そしてその苦難は、直接的に奴隷主から加えられるものもあれば、女主人から嫉妬・憎悪の対象とされることによってもたらされるもの、また自身の家族からもたらされる眼差しによるもの、慣習や規範、権力によって強制される沈黙など、多層的な苦難であった。これらから逃れるためには、クラフト夫妻が指摘しているように死ぬか逃亡するしかなかった。そして逃亡を試みた多くの女性奴隷たちが存在した。

もちろん奴隷が逃亡するのは、クラフト夫妻のように奴隷という苦しみから逃れ、自由になるためではあったが、逃亡を決断する理由はさまざまであった。トルースの場合、主人が彼女を解放すると約束したにも関わらず、約束の時が来ても難癖をつけて解放を引き延ばし解放しなかったために、彼女は逃亡を決

意した。またジェイコブズの場合は、子どもたちの安全を確保するために逃亡することを決意した。彼女を性的に自由にすることが出来なかった主人は、子どもたちを人質のように扱うことによって性的関係を要求するようになっていたのである。そこで彼女は、自分が逃亡してしまえば子どもたちの利用価値は低くなり、主人は彼女の子どもたちを売りに出すことになるだろう。そうなれば父親であるソーヤーが子どもたちを買い取ることが出来、結果として子どもたちの安全が確保できるだろうと考え、逃亡することを決断したのであった。

また逃亡の方法もタブマンがほかの奴隷仲間を助け出したように、「地下鉄道」(“the Underground Railroad”)⁽⁴³⁾を利用して組織的に逃亡した場合もあるが、組織を利用せずに逃亡する場合もあった。その場合彼／女たちはさまざまな方法を用いて逃亡を行った。クラフト夫妻の逃亡方法は、奴隷を奴隷主のもとにつなぎとめておくための慣習と、自らの肌の色を逆手にとった非常に独自のものであった。すでに述べたように自由黒人であれ奴隷であれ、黒人は外出するためには通行証明書を携帯しなければならなかった。また奴隷の場合は奴隷主と共に行動しなければならなかった。そこでクラフト夫妻が逃亡の手段として用いたのは、白人のように肌の白い妻エレンが男装して白人の奴隷主を演じ、夫はその奴隷を演じながら逃亡することであった。

奴隷が逃亡するさい最も恐れたことは、逃亡奴隷であるということがばれてしまうことである。それは強制的に奴隷主のもとへ送還されることを意味しており、また同時に過酷な罰を受けなければならないことを意味していた。だからこそ逃亡の途中にある奴隷たちは、昼間は森や「駅」に身を隠し、日が暮れてから闇に身を隠して移動しなければならなかったのである。しかしクラフト夫妻は、奴隷主と奴隷を演じることによって、合法的な移動を演じると共に、白昼でも堂々と行動をすることが可能となったのである。

またエレンが男装することによって、黒人男性と白人女性が行動を共にするというタブーを回避することにもなった。当時の規範において、白人男性が黒人女性と行動を共にすることは取り立てて問題視されることは無かったが、白人女性と黒人男性が行動を共にすることは非常に危険な行為であった。それは

女主人と奴隷という関係にあったとしても同様である。なぜなら、性的に〈野蠻〉であるとみなされていた黒人男性が、白人男性の〈所有物〉である白人女性と接近することは、白人の血統を〈汚す〉行為とみなされ、白人男性の権威・権力を貶める行為⁽⁴⁴⁾とみなされたためである⁽⁴⁵⁾。そのような状況のなか、白人を扮することが出来るほどに肌の色が白かったエレンと、黒い肌のウィリアムがそのままの姿で共に逃亡することは、あまりにも目立ちすぎる行動であり、危険な行動だったのである。

一方、自分の子どもたちの安全を守るために逃亡をすることを決心したジェイコブズもまた、独自の方法で逃亡を試みている。彼女は実際に南部を離れるのではなく、逃亡したかのように見せかけて友人の家などに隠れ住み、子どもたちの安全が確保されるのを待っていたのである。子どもたちがソーヤーに買収され、祖母の家で暮らすようになってからは、祖母の家の屋根裏に移り、そこから子どもたちの成長を見守ることになった。彼女が屋根裏での暮らしを始めたとき、そこは光のまったく差し込まない、立つことすら出来ない、暗く狭い場所であった。朝と夜の区別もつかないその場所で彼女は、外から聞こえてくる音だけを頼りに毎日を過ごした。そのような状況にあった彼女を励ましたのは、外から聞こえてくる子どもたちの声であった。

そんなある日ジェイコブズは、屋根裏に置き忘れられていた錐を発見した。ロビンソン・クルーソーが得難い宝物を発見したとき以上の喜びだったと回想する彼女が真っ先に考えたことは、「これで子供たちを目にすることが出来る」⁽⁴⁶⁾であった。壁に1インチ四方の穴を空けることに成功した彼女は、子どもたちの顔が見えることを願って、夜更けまでその穴を覗き続けたのである。このような生活が、子どもたちが祖母の家を離れるまで、ほとんど誰にも知らせることなく約7年間続けられたのであった。彼女が自分自身のために逃亡をすることを決意するのは、娘が祖母の家を離れたときであった⁽⁴⁷⁾。

トルースの場合、クラフト夫妻やジェイコブズのように手段を考え抜いたうえで逃亡を決行したようには、彼女の語りからは思われない。彼女は片手に末の子どもを抱いて、もう片方に衣装ケースを持って逃亡した。彼女は逃亡する

前、「夜道に行くのは怖いし、日中では誰かに見つかってしまうだろう」⁽⁴⁸⁾と神に対して逃亡することに対する不安を語りかけている。これに対して、みんなが起きだす夜明け直前に出発すれば良い、という「神からの直接の応えを受け取った」⁽⁴⁹⁾彼女は、その言葉通り、夜が明ける直前に出発した。

まずトルースは、知り合いであったレヴィ・ロウ (Levi Rowe) を訪ねた。彼は病床にあったため彼女を匿うことは出来なかったが、反奴隷制論者であったヴァン・ワグナー夫妻 (Mr. Isaac S. Van Wagener, Mrs. Maria Van Wagener) を紹介した。その後彼女は夫妻の家を訪ね、そこに身を寄せることになった。当然のことながら逃亡奴隷となった彼女には追っ手がかけられ、すぐに見つかってしまう。奴隷主は彼女を連れ戻しにヴァン・ワグナー家を訪れるが、彼女は一年前の約束を理由に奴隷主のもとに帰ることを拒否し、二人の意見が噛み合うことはなかった。結局彼女と彼女の子どもは、ヴァン・ワグナー夫妻に 20 ドルで買い取られることになり、その後夫妻によって解放されることになった。

トルースのように信頼できる白人に自身を買い取ってもらい、自由を手にするというケースは少なくなかったようである。クラフト夫妻の場合も、逃亡を決断する以前に、信頼できる白人に自分たちの自由を買い取ってもらうことの可能性を考えていたし、ジェイコブズの子どもたちも、父親であるソーヤーによって買い取られることによって安全を確保している。また逃亡後のジェイコブズもまた、逃亡先での新しい主人が彼女を奴隷として買い取った後に解放し、はじめて自由の身となっている。

新しい女主人がジェイコブズを買い取りたいと申し出たとき、「自分を一個の財産とみなすことがますますできにくくなっていたし、私をひどく苦しめた人たちに金を払って自由を買うことは、私の苦しみからの勝利の榮譽を剥奪するかのよう思われた」⁽⁵⁰⁾ ために彼女はその申し出を断っている。最終的にこの申し出どおりに彼女は買い取られることになるのであるが、彼女の自由は、奴隷制が認められていない自由州において行われた人身売買によって獲得されたものとなってしまった。ジェイコブズと女主人の間にどんなに深い友情が存

在していたとしても、この皮肉を消し去ることは出来ない。

また彼女たちの逃亡において重要なことは、多くの仲間に支えられていたという点である。もちろん、「地下鉄道」などの組織を利用した逃亡の場合は、多くの支援者がいたのは当然のことであるが、ここで紹介したような個人的な逃亡においても、多くの仲間たちが彼女たちの逃亡を支えていた。トルースの場合は、彼女を匿い、自由を買い取ってくれたヴァン・ワグナー夫妻がいた。クラフト夫妻の場合は、逃亡するときに必要な変装の道具を秘密裏に調達してくれた仲間がいたし、ジェイコブズの場合もまた彼女を匿っていた仲間がいたからこそ、約7年もの間屋根裏に潜み続けることが出来たのである。

Ⅳ 黒人女性奴隷と自らの体験を書く／語ること

黒人女性奴隷がどのような体験を経て、奴隷制から逃亡したのかを紹介してきたが、それでは彼女たちにとって、逃亡したあと自らの体験を書いたり、語ったりすることにはどのような意味があったのであろうか。岡真理は、元日本軍「慰安婦」が自ら受けた虐待を語る行為は、「自らの傷ついたからだを切り裂いて、その内部をえぐり出す」⁽⁵¹⁾ ようにしてなされた行為であったことを指摘しているが、元奴隷であった彼女たちの場合もまた同じだったはずである。それでもなお彼女たちが自らの行為を書いたり、語ったりしたのは、奴隷という苦難を味わい、傷つけ続けられている女性奴隷のためだったのである。

自らの体験を語った目的がもっとも明確であったのは、タブマンである。彼女は奴隷解放後、年老いた黒人たちが安心して暮らすことの出来る場所として、今日の老人ホームのような施設である、「ジョン・ブラウン・ホーム」(the John Brown Home)を開設している。彼女はこの施設の運営資金を調達するために、伝記の出版を行ったのである。

またジェイコブズの場合、自伝を執筆する目的を次のように記している。

私は自分自身に関心を引きつけようとして、自分の経験を書いてみたわけ

ではありません。まったくその逆です。自分の過去の出来事については、沈黙を守っていたほうがずっと気楽だと思います。また、私は自分の被った苦難のために、人の同情を買おうという気もありません。ただ、私が心から願っていることは、まだ奴隷の状態にあって、私のなめた苦難を今なお味わっている二百万人の南部女性の境遇に対して、北部の女性たちの鋭敏な意識を目覚めさせることです。⁽⁵²⁾

つまり彼女が自伝を執筆したのは、自らに対する関心や同情を買うためではなく、未だに過酷な運命に翻弄され、奴隷として南部に縛り付けられている200万人もの女性奴隷に対する北部の白人女性の関心を喚起するためであった。奴隷制を形式上は有さない北部においては、奴隷制に反対し、撤廃を求める動きがある一方で、黒人が奴隷にされているのは黒人自身の資質の問題であるとか、奴隷制は南部を支える正当な制度であるなどとして、奴隷制の存在を擁護する人々も多かった⁽⁵³⁾。このような状況を打破し、奴隷制に眼を向けさせることがジェイコブズの自伝執筆の目的だったのである。

またクラフト夫妻の場合既に述べたように、白人もまた奴隷にされていたという事実を記している。これもまたジェイコブズ同様、奴隷制の存在に無関心な白人たちの眼を、奴隷制に向かわせるための一つの手法だった。拉致や誘拐によって奴隷にされてしまう危険にさらされているのは決して黒人だけではなく、白人もまたそのような危険にさらされているという事実を知らせることによって、奴隷制の問題が黒人だけの問題ではないことを明らかにし、白人自身の問題でもあることを示すことによって、クラフト夫妻は奴隷制に対する白人の関心を喚起しようとしていたと考えられる。

またパターンソンは、奴隷は「生きている現実を意識的な記憶の共同体に定着させることができない」、歴史を剥奪された存在であるとしている⁽⁵⁴⁾。元女性奴隷たちが自分たちの体験を書き、語るという行為は、この剥奪された〈歴史〉を自分たちの手に取り戻すことでもあったのである。

ジーン・F・イエリンは、ジェイコブズの自伝が異なる二つの文体で書かれ

ていることを指摘し⁽⁵⁵⁾、福田千鶴子はその文体が説得力のある文体と、当時流行していたメロドラマ的文体であるとしている⁽⁵⁶⁾。ジェイコブズは、流行のメロドラマ的文体において自身の経験を語ることによって、北部女性たちの奴隷制に対する関心を引き起こし、説得的文体を用いて奴隷制の実態を描くことによって、南部社会には奴隷にされた黒人の歴史、黒人女性の歴史が隠されていることを知らせようとしていたのである。このことはクラフト夫妻の場合も同じであり、自分たちの体験を綴りながらその一方で、奴隷を過酷な境遇へと追いやることになった多くの法律を引用することによって、決して夫妻だけが経験した私的な、あるいは特別な体験なのではなく、多くの奴隷に共通の体験であることを示しているのである。

ジェイコブズは自伝の最後を次のように締め括っている。

私が奴隷という身分で過ごしたみじめな年月を思い出すことは、さまざまな意味で私にとって辛いことでした。できれば、喜んでそれらを忘れてしまいたいのです。しかし、過去を思い出すことがまったく慰めのないことかと言えば、必ずしもそうではありません。なぜなら、気の滅入るような思い出とともに、やさしい老いた祖母の心温まる思い出が、暗く荒れた海の上にぽっかりと浮かぶ明るいふわふわした雲のように蘇ってくるからです。⁽⁵⁷⁾

この一節は、ジェイコブズが自身の体験を書き記すことによって、社会的に意味を認められることのない、「暗く荒れた海」に沈められた女性奴隷の歴史に光を当てていたことを示している。またこの一節は、彼女が歴史から切り離された存在ではなく、祖母や弟、そして子どもたちや、コミュニティの仲間たちなど、多くの存在に支えられた存在であることを示している。そしてその一方で、彼女は自伝を書き記し、彼女の多くの仲間たちの存在を歴史に書き記すことによって、彼女もまた多くの仲間たちを支える存在となっていたのである。

「自らの傷ついたからだを切り裂いて、その内部をえぐり出す」ように体験を書いたり、語ったりした元奴隷であった黒人女性たちは、その行為を通じて彼女自身の歴史に意味を与え、彼女たちを支えていた多くの奴隷仲間たちの歴史に意味を与えていたのである。また彼女たちはその行為を通じて、彼女たち自身が歴史を作る主体であることを示すのと同時に、奴隷仲間たちもまた歴史を作る主体であることを示し、奴隷仲間たちの歴史が彼女たちの歴史の一部であるように、彼女たちの歴史が奴隷仲間たちの歴史の一部であることを示したのである。

ま と め

本稿で紹介した女性奴隷の人生は、差別との闘いの人生であった。彼女たちは奴隷として制度に拘束されているあいだも、逃亡を果たし自由を手に入れてからも、一貫して奴隷制という人種差別政策と闘っていたのである。ジェイコブズやエレン・クラフトは自伝を書くという行為を通じて仲間を救うための闘いを展開し、タブマンは「地下鉄道」の車掌としての活躍や「ジョン・ブラウン・ハウス」の建設を通じて黒人女性のための闘いを行った。またトルースは、奴隷解放運動のみならず女性解放のためにも献身した。逃亡後の彼女たちの行動が示しているのは、彼女たち自身の自由を獲得することだけが逃亡の目的だったのではなく、すべての奴隷、あるいは黒人にとっての自由獲得が目的であったことである。

このような意識は、実際に逃亡した元女性奴隷だけではなく、彼女たちの逃亡を手助けし、奴隷制の内にとどまることになった仲間たちにも共通のものであった。このことはジェイコブズの逃亡を手伝った友人が、ジェイコブズの逃亡を自分のことのように喜んでいたり⁽⁵⁸⁾、彼女の弟ジョンが自由州にとどまる決心をしたことを聞いた祖母の友人が大喜びしたこと⁽⁵⁹⁾ などから明らかである。奴隷社会においては、一人の成功は全体の成功への第一歩だったのである。このような考え方に、ブラック・フェミニズムの源流を見出すことが

できる。

白人のフェミニズムが「名前のない問題」から解放され、より良く生きることが求めて出発したとするならば、ブラック・フェミニズムは社会に蔓延する性差別・人種差別から解放され、「社会で生き抜くこと」を切実な課題として出発した。この「社会で生き抜く」という課題は、ブラック・フェミニズムと呼ばれるフェミニズムが登場したことによって黒人女性に意識された問題ではなく、北米大陸における黒人女性の歴史が始まって以来、常に彼女たちと共に存在し続けてきた意識である⁽⁶⁰⁾。また彼女たちにとって「社会で生き抜くこと」とは、本稿で紹介した元奴隷であった彼女たちがそうであったように、単に自分だけが生き抜けば良いのではなく、家族や仲間と共に生き抜くということであった。だからこそブラック・フェミニストたちは、黒人社会の内部に存在する黒人男性による性差別の告発を行う一方で、黒人男性と共に闘い生き抜く仲間としてきたのである。ベル・フックス (bell hooks: 1952～)⁽⁶¹⁾ は次のように指摘している。

アメリカにおける黒人女性の歴史を通じて、私たちは人種差別の抑圧に抵抗するあらゆる闘いの中で、男性と等しい責務を担ってきた。(中略) ここには、解放のために集団で闘う人々を結束させる特殊な絆がある。黒人の女性と男性は、そうした絆で結ばれてきた。⁽⁶²⁾

アメリカ黒人女性は、「社会で生き抜くため」に常に差別と闘ってきた。その闘うべき相手は、実際の差別であると同時に、彼女たちが社会から付与されてきたイメージでもあった。「マミー」「ジェマイマおばさん」「ジェゼベル」^{トラジック・ムラータ}「悲劇の混血娘」など彼女たちに付与されたイメージは、時代によって形態は異なるものの、その原型は既に奴隷制時代に形成されていた。特に奴隷制時代に白人男性が女性奴隷を性奴隷として扱い、性処理の道具として扱ってきたことは、奴隷から解放された黒人女性に付与されるイメージが常に性と結び付けられてきたことに大きな影響を与えている⁽⁶³⁾。荒このみは黒人女性を性的に

「動物なみ」の存在と潜在的に感じているアメリカ人が、20世紀半ばを過ぎても多数存在していたことを指摘しているが⁽⁶⁴⁾、これらのイメージを払拭することもまた、ブラック・フェミニズムの大きなテーマであった。

元女性奴隷の体験記が伝えているのは、彼女たちは奴隷として労働力が搾取されていたばかりではなく、性奴隷として性もまた搾取されていたということであった。つまり彼女たちが自由になるためには、奴隷から解放されるばかりではなく、性的搾取からも解放されなければならなかったのである。人種差別と性差別からの解放を求め、仲間と共に社会で生き抜くことを目指したブラック・フェミニズムの闘いは、既に奴隷制時代より始まっていたのである。

トニ・モリスン (Toni Morrison: 1931～) は、「アフリカ系アメリカ人の作家として、男女の性で区別され、性差別と人種差別がまかり通っている世界の中で、自分がいかに自由になれるか、考えてみる必要がある」⁽⁶⁵⁾ ことを指摘している。アメリカ黒人女性は、女性奴隷の体験を文字で残し、あるいは仲間たちの間で語り継ぐことを通じて、奴隷制時代から今日に至るまで、「社会で生き抜くため」に常にこの問題を考え続けてきたのである。

〈注〉

- (1) 本稿は現在執筆中の博士論文、「語り継がれる抑圧の歴史・繰り返し甦る抑圧の記憶：アメリカ黒人女性史における奴隷体験の意味」(仮題)の「第1章 アメリカ黒人女性と奴隷体験記」のための予備的考察である。本稿においては主に、ハリエット・ジェイコブズ、クラフト夫妻の体験記と、ソジャーナー・トルースの語りを分析の対象としているが、博士論文ではこのほかに、ハリエット・タブマン、メアリ・プリンス、マライア・パーキンズなどの体験記や語りを含めて考察する予定である。
- (2) 多文化主義の文脈では、〈アメリカ黒人〉を示す表現として「アフリカ系アメリカ人」「アフリカン・アメリカン」が好んで使用されているが、本稿ではその意義を理解した上で、「アメリカ黒人」あるいは「黒人」と表記することにする。それは日本においては、「黒人」のほうがより一般的な呼称だからである。
- (3) 鄭 暎恵「フェミニズムのなかのレイシズム」：99-100 頁
- (4) 〈ウーマニズム〉とはアリス・ウォーカーによる造語。ブラック・フェミニズムという概念は、フェミニズムが白人中産階級女性のものでしかなく、黒人女性

を対象とはしていなかったために黒人女性たちのフェミニズムを表わすために用いられている。しかしウォーカーは、ブラック・フェミニズムとハイフン付きで自らが名乗ることによって、黒人女性のフェミニズム、あるいは黒人女性という存在が白人女性の亜種・亜流な存在になってしまうとの考えから、黒人女性のフェミニズムとしてウーマニズムという概念を創出した。

ウォーカーはウーマニストを、①黒人または有色人種のフェミニストのこと、②男も女も性的にもプラトニックにも愛し、民族全体が生き残り、民族の文化が守られるよう尽力する女性のこと、③音楽、ダンス、月、神、愛、食べ物、バランスのとれたもの、闘い、人々、自分自身、この世界すべてを愛する人、④「ウーマニスト」と「フェミニスト」の関係は、「パープル」と「ラヴェンダー」の関係に似ている、と定義している（Walker, *In Search of Our Mothers' Garden*, pp. xi-xii）

- (5) 大橋 稔「ローザ・パークス再考」参照。拙稿で示したハワード・ジンやアリス・ウォーカーの歴史観とは、歴史に記された大きな運動の陰には必ず小さな運動が存在しており、それらの小さな運動が集まることによって大きな運動が形成されるというもの。特に人種差別や性差別などの差別や抑圧に対抗する運動の場合、小さな運動について注意が払われることはほとんどない。それ小さな運動は、歴史を〈記述〉し定位させる側、つまり社会の権力・中心の側により近いものにとっては〈大きな〉意味を成さないからである。歴史とは、だれがどのような視点から記述するのかによってその風貌は大きく変わってしまうのである。
- (6) 岩本裕子「ブラック・フェミニズムの源流を探る」：177 頁
- (7) タブマンは、逃亡によって自由を得た元奴隷。彼女は逃亡後、「地下鉄道」（註42 参照）の車掌として南部に繰り返し潜入し、親類縁者を含め 300 人以上の奴隷を逃亡させている。この勇敢な活動から彼女は、モーゼの出エジプトになぞらえて「女モーゼ」と称されている。また彼女の首には、彼女の活動を恐れた奴隷主によって4万ドルの懸賞金がかけられていた。南北戦争中には従軍看護婦として参加し、北軍のスパイとしても活躍した。
- (8) トルースもまた逃亡によって自由を獲得した元奴隷。逃亡後彼女は説教師として活躍し、奴隷解放と女性の権利獲得のために闘っている。説教師である彼女のコトバには、人を勇気付ける力強さがあった。1851 年、女性の権利擁護のためのある集会に彼女は参加していた。その集会で白人男性の牧師が、イエスは男であり、女性のか弱い存在であると演説していた。それを客席で聞いていた彼女は突然立ち上がり、イエスは神と一人の女性のあいだに生まれたのであって、イエスの誕生に男性は一切関わっていないと反論した。また彼女は、奴隷労働によって鍛えられた腕を見せながら、決して自分のか弱い存在などではないことを示した。そして彼女は、自分は男性よりも多く働き、多く食べ、長生きして見せると

語り、「そういうわたしは女じゃないの？」(Ain't I a woman?) と言い放った。この反論は現代まで語り継がれ、多くの黒人女性に勇気を与え続けている。

- (9) 岩本「前掲論文」: 174 頁
- (10) 自らの手で体験記を執筆した元奴隷が、文字の読み書きの能力を手にした経緯はさまざまである。奴隷に読み書き教育を行うことは禁じられていたにも関わらずハリエット・ジェイコブズの場合、自分の娘と同じように彼女に接していた女主人から読み書き教育を受けていた。またフレデリック・ダグラスやクラフト夫妻などのように、逃亡後に読み書きを独学などで学んだものもいる。さらにメアリ・プリンスの場合は、彼女が世話係をしていた主人の娘たちが学校などで学んだことをプリンスに話すことによって、読み書き能力を身に付けている。
- (11) Frederick Douglass. *Narratives of the Life of Frederick Douglass, an American Slave: Written by Himself*. [1854] Ed by William L. Andrews et. al. *Slave Narratives*. New York: Library of America, 2000. 2687-368. 和訳として、岡田誠一訳『数奇なる奴隷の半生：フレデリック・ダグラス自伝』（法政大学出版局，1993）がある。ダグラスは 20 歳の頃に逃亡し、説教師となり奴隷解放運動、女性の権利獲得運動に積極的に関わる。奴隷解放後は、特に選挙権獲得運動に尽力する。1871 年駐サント・ドミンゴ大使館付き書記官，77 年連邦執行官，89 年ハイチ駐在アメリカ公使となる。（岡田「訳者あとがき」：170 頁）
- (12) Booker T. Washington. *Up from Slavery*. [1901] New York: Signet Classic, 2000. 和訳として、稲澤秀夫訳『奴隷より立ち上がりて』（中央大学出版部，1978）がある。ワシントンは逃亡後，1875 年にハンプトン学校（Hampton Institute）を卒業し教師となる。81 年に黒人が自立するために必要な教育を行うタスキーギ職業訓練学校（Tuskegee Normal and Industrial Institute, 現在の Tuskegee University）を創設した。その後は連邦政府の黒人政策に関する助言なども行っている。彼の主張の特徴は、黒人の自助自立を説き、黒人が白人的価値観、白人社会において認められることを重視したことにあるが、このような彼の姿勢に対しては、当時より白人への同化主義であるとの批判もなされている。
- (13) 姉弟であったハリエット・ジェイコブズとジョン・ジェイコブズはそれぞれに自伝を残している。ハリエットの自伝には、彼女が性奴隷とみなされることによる苦しみなどが描かれているが、ジョンの自伝では姉のジェンダーゆえに苦しみについて言及されることはない。同じ時間を共有した姉弟の自伝を比較することは、ジェンダー研究として非常に興味深い。しかしそれは本稿の目的を超えてしまうため、別稿への課題とする。
- (14) オーランド・パターソン『世界の奴隷制の歴史』: 46 頁。傍点原文。
- (15) ジェイコブズは自伝を執筆しているが、実名を明かして執筆しているわけでは

ない。彼女は、すべての登場人物に仮名を用いて自伝を執筆している。このことが彼女の自伝が創作であるとか、白人の手によるものであると疑われる原因となっていた。ちなみに彼女の自伝の中での名前は、リンダ・ブレント (Linda Brent) である。弟ジョンはウィリアム (William)、彼女の子どもたちを買い取ったサミュエル・ソーヤーはサンズ (Mr. Sands)、彼女の奴隷主であるノーコム医師はフリント医師 (Dr. Flint) と称されている。

- (16) ハリエット・ジェイコブズ『ハリエット・ジェイコブズ自伝』: 90 頁。() 内は引用者。ジェイコブズの自伝から引用する場合、小林憲二編訳を用いることにする。
- (17) ジェイコブズ『同書』: 97 頁
- (18) 本稿で取り扱うクラフト夫妻による奴隷体験記の著者は、William and Ellen Craft となっているが、本文で妻 Ellen のことが “My wife” と表記されていることから、概ね夫ウィリアムが書いたものだと思う。しかし本稿では、聞き書きもまた黒人女性の体験を記しているという考えから、クラフト夫妻の体験記も黒人女性の体験を記した体験記として扱うことにする。
- (19) William and Ellen Craft, *Running a Thousand Miles for Freedom*, p. 686.
- (20) ジェイコブズ『前掲書』: 100-101 頁。傍点原文。
- (21) Sojourner Truth, *Narrative of Sojourner Truth*, pp. 626-27.
- (22) 弟ジョンの自伝 “A True Tale of Slavery.” は、*The Leisure Hour: A Family Journal of Instruction and Recreation*. (1861 年 2 月 7, 14, 21, 28 日号) に連載された。また現在では、イェリオン編集 Harriet Jacobs, *Incidents in the Life of a Slave Girl: Written by Herself*. Cambridge, MA: Harvard UP, 2000. の 207-228 頁に収録されており、容易に読むことが出来る。
- (23) Craft, *op. cit.*, p. 688.
- (24) Craft, *ibid.*, p. 701.
- (25) Craft, *ibid.*, pp. 682-83. 後にサロメは親戚によって発見され、奴隷から解放されているが、ドロシアの消息については結局不明のままとなってしまった。
- (26) Craft, *ibid.*, p. 684.
- (27) Truth, *op. cit.*, p. 590.
- (28) Truth, *ibid.*, pp. 590-91.
- (29) エレンはイギリスへの逃亡から合衆国へ戻ったあと、ウェイズ・ステーション (Ways Station, GA) に子どもたちのための学校を設立し、運営を行った。しかしその学校経営は、資金の調達や、地元の白人たちの反発により、決して成功していたとは言えなかった。
- (30) Craft, *op. cit.*, p. 684.
- (31) 性奴隷という用語について、明確な定義が存在するわけではない。よって本稿

で「性奴隷」という用語を用いる場合、どのような状態を示しているかについて若干説明する必要がある。自らの性行為に関して自己決定する権利が剥奪され、主人などの他者によってその権利が占有されている状態にある人、あるいはそのようにみなされている人を、本稿では「性奴隷」と定義することにする。

- (32) ジェイコブズ『前掲書』: 122-23 頁
- (33) Craft, *op. cit.*, p. 689.
- (34) 合衆国憲法第1条第9節によって1808年以降、奴隷を輸入することが禁じられていた。そのため08年以降、労働力としての奴隷を輸入することが出来なくなってしまった。そこで白人農園主たちは、奴隷の数を増やし労働力を確保し、なおかつ財産を増やす方法として〈レイプ〉を頻繁に多用するようになったと考えられる。
- (35) Craft, *ibid.*, p. 689.
- (36) ジェイコブズ、『前掲書』: 98 頁
- (37) Craft, *op. cit.*, pp. 690-91.
- (38) ジェイコブズ『前掲書』: 132 頁
- (39) ジェイコブズ『同書』: 98-99 頁
- (40) ジェイコブズ『同書』: 124 頁。() 内は引用者。
- (41) ジェイコブズ『同書』: 125 頁
- (42) ジェイコブズ『同書』: 168 頁。() 内は引用者。
- (43) 「地下鉄道」とは、奴隷がカナダへ逃亡するのを手助けした地下組織。この組織には、奴隷制に反対する白人によって提供された「駅」と呼ばれる隠れ家があり、その駅と駅とのあいだを案内し、カナダへと案内する「車掌」と呼ばれる案内人がいた。タブマンはこの組織の「車掌」を務めていた。
- (44) 〈レイプ〉という行為には、その被害者個人の尊厳を侮辱する行為以上の政治的な「意味」が付与されている。スーザン・ブラウンミラー (Susan Brownmiller: 1935~) は、異民族間で〈レイプ〉を行う、〈レイプ〉の被害にあうということは、個人的な問題とみなされるよりも、民族の〈恥辱〉としてみなされること、また自民族の女性が〈レイプ〉の被害にあうということは、民族間の支配／被支配の関係のメタファーとしてみなされることを次のように指摘している。

「古来、侵略された側の男たちにとって、自国の女がレイプされるということはこのうえない恥辱とされてきた。それは性を武器にしたとどめの一撃に匹敵する。強かんは自分たちを滅ぼすための敵側のもくろみの一部とみなされるのだ。(中略) 女の身体は、勝利者が軍旗を掲げて行進する戦場のメタファーとなる。女の身体に加えられる行為は、男と男の間に交わされるメッセージ、一方にとっては勝利を、他方にとっては敗北を色鮮やかに物語るメッセージなの

である。」(ブラウンミラー『レイプ』: 38 頁)

当然ブラウンミラーが指摘するこの論理は男性の視点のみを示したものであって、その男性の視点には女性の人権や尊厳に関する配慮は一切含まれていない。

- (45) このような状況は、公民権運動期まで続いていた。1955 年 8 月、シカゴで生まれ育ったエメット・ティル (Emmet Louis Till: 1941~1955) 14 歳は、ミシシッピ州モーネイ (Money, MS) の叔父の家へ夏休みを利用して遊びに来ていた。そのとき南部の〈掟〉を知らない彼は、白人女性に対して声をかけてしまった。それは雑貨店から出るときに店員であった店主の妻に “Bye Baby” と云っただけであるが、黒人男性が白人女性に〈卑猥〉な言葉をかけたとみなされ、その日の夜、リンチされ殺害されてしまった。彼の遺体は数日後に発見されるが、顔は叩き潰され、頭は銃で撃ち抜かれていた。まもなく夫ロイ・ブライアント (Roy Bryant) と彼の義兄である J. W. ミラン (J. W. Milam) が犯人として逮捕された。彼らの犯行であることを示す証拠は十分にそろっていた。しかし裁判の結果彼らは、〈無罪〉となった。当時の南部社会では、〈掟〉を守らない黒人を白人がリンチなどで殺した疑いで逮捕されたとしても、裁判で〈無罪〉となることになっていた。裁判とは名ばかりで、見せ掛けだけの審議しか行われていなかったのである。ブライアントとミランは後日雑誌のインタビューで、ティル少年殺害の詳細について語っている (岩本『スクリーンに見る黒人女性』: 110-118 頁)。
- (46) ジェイコブズ『前掲書』: 268 頁
- (47) このとき娘のルイサ (Louisa Matilda Jacobs: 1833~1917) は、ブルックリンに住むソーヤーの親戚のもとへ行くことになった。ソーヤーとジェイコブズ (実際には彼女は逃亡したことにしていたので、代理として祖母) の間で、ルイサを「十分に世話し、学校に行かせる」(ジェイコブズ『同書』: 303 頁) との約束がなされていた。またこの時点では、まだ息子のジョセフ (Joseph Jacobs: 1829~1863?) は父親であるソーヤーの奴隷であった。しかしジョセフは、ジェイコブズの叔父であるマーク・ラムジー (Mark Ramsey: 1800?~1858) と一緒であるならば、いつでも北部へ行って良いとの許可をソーヤーから受けていた。
- (48) Truth, *op. cit.*, p. 596.
- (49) Truth, *ibid.*, p. 596.
- (50) ジェイコブズ『前掲書』: 404 頁
- (51) 岡 真理『思考のフロンティア 記憶／物語』: 31 頁
- (52) ジェイコブズ『前掲書』: 80 頁。傍点は引用者。
- (53) 土田宏はそのような例として、ニューヨークのセントラルパークを設計したフレデリック・オルムステッド (Frederick Law Olmsted: 1822~1903) について言及している。オルムステッドは奴隷制には反対していたが、南部諸州を旅行した経験から決して奴隷制は北部の人々が思っているほど〈酷い〉制度などではな

いとの考えに至り、もっと北部の人々は南部の人々にたいして寛容になるべきであることを主張している。また南部の白人が奴隷制より得ている利益と、北部の白人が労働者から労働力を搾取し、先住民から土地を略奪して得ている利益とのあいだに大差はないという観点から、北部の人々が南部の人々を〈正義〉という観点からも批判できるものではないことも指摘している（土田「ある知識人とアメリカ南部」：39-40頁）。

しかしオルムステッドのこのような主張は、奴隷制は奴隷である黒人と奴隷主である白人とのあいだに、何らかの信託関係があるという前提に基づいたものであった。そのため彼は、南部白人との対話が深まる過程においてその前提が覆されたとき、奴隷制に対する発言をひかえるようになり、最終的には奴隷制反対の立場をより明確にして行くことになる。

- (54) パターソン『前掲書』：32 頁
- (55) Jean F. Yellin. "Introduction," p. xiv.
- (56) 福田千鶴子「フェミニズムの書としての奴隷体験記」：214 頁
- (57) ジェイコブズ『前掲書』：407-408 頁
- (58) ジェイコブズ『同書』：262 頁
- (59) ジェイコブズ『同書』：298 頁
- (60) 第二派フェミニズムの原点の一つとされている『新しい女性の創造』（原題：The Feminine Mystique, 1963）においてベティ・フリーダン（Betty Friedan: 1921～）は、「得体の知れない悩み」（フリーダン『新しい女性の創造』：27 頁）として女性の問題を記した。しかし彼女が明らかにした女性の問題とは、高学歴の白人中産階級既婚女性の問題でしかなかった。白人女性を苦しめている、結婚後は専業主婦として家庭の中に閉じ込められ、夫や子どもの世話、家事だけを行っていれば良いという〈^{フェミニン・ミステイク}女らしさの神話〉は、常に家計を支える労働力として働き続けなければならなかった黒人女性にとっては、一種の〈成功〉の象徴であった。
- また白人女性のフェミニズムは、女性が一枚岩の存在であることを前提として出発したが、実際には女性というカテゴリーのなかにもさまざまな分断線が存在していた。アメリカ黒人女性は、女性が女性であるということだけを根拠として連帯できるとすることの欺瞞性をいち早く看破していた。なぜなら彼女たちは、人種・ジェンダー・階級といったさまざまな差別が交錯する存在であり、北米大陸における被抑圧者が何らかの権利を獲得するさいに、その穴埋めをすることを強要され続けてきたからである（大橋「女性学の戦後」：191 頁）。
- (61) ベル・フックスの本名は、グロリア・ワトキンス（Gloria Watkins）である。彼女は、ペンネームで執筆活動を行っているわけであるが、彼女は自分の名前を Bell Hooks と大文字で綴るのではなく、bell hooks と小文字で綴ることにこだわっている。ここにはフェミニストである彼女の、ビッグネームな〈わたし〉と

してではなく、一人の黒人女性の〈わたし〉として生き、活動し、執筆・発言を続けて行きたいという主張がこめられている。

- (62) ベル・フックス『ブラック・フェミニストの主張』: 103 頁
- (63) 黒人女性が白人男性を性的に誘惑する存在であることを示す「ジェゼベル」や「悲劇の混血女」は、白人男性が黒人女性を性的に利用するために創り出された、黒人女性を性的存在へ定位し、その責任を黒人女性に転嫁するためのステレオタイプであった。このステレオタイプは、奴隷制時代より白人男性が黒人女性の性を搾取し続けてきたことに由来する。またこのようなステレオタイプが存在していたために、黒人社会においても黒人女性の性は黒人男性によって搾取されることになった。

しかし「ジェマイマおばさん」や「マミー」からは性的イメージが完全なまでに削ぎ落とされている。黒人女性を〈メイド〉として白人家庭に囲い込むためには、その黒人女性から性的イメージを欠落させることは絶対的に必要なことであった。なぜなら黒人女性を白人の家庭で働かせるためには、彼女たちが白人家庭のロマンティック・ラブの規範 (Romantic Love Ideology: 男女による「性・恋愛・結婚」が三位一体であるべきとする規範) を乱さない〈安全〉な存在でなければならなかったからである。このステレオタイプもまた、奴隷制時代に黒人女性を家内奴隷とし、家事・育児をさせてきたことに由来している。そしてこのステレオタイプも、黒人女性から性的イメージを欠落させることによって成立しているという点において、性と深く結び付けられていると言える。

- (64) 荒このみ『黒人のアメリカ』: 185 頁
- (65) トニ・モリスン『白さと想像力』: 22 頁

引用・参考文献

- Bradford, Sarah H. *Harriet Tubman: the Moses of her People*. [1886] Secaucus, NJ: Citadel, 1961.
- Craft, William and Ellen. *Running a Thousand Miles for Freedom: or, the Escape of William and Ellen Craft from Slavery*. [1860] Ed by William L. Andrews et al. *Slave Narratives*. New York: Library of America, 2000. 677-742.
- Jacobs, Harriet. *Incidents in the Life of a Slave Girl: Written by Herself*. [1861] Ed by Jean F. Yellin. Cambridge, MA: Harvard UP, 2000 (小林憲二編訳『ハリエット・ジェイコブズ自伝：女性・奴隷制・アメリカ』明石書店, 2001)
- Truth, Sojourner. *Narrative of Sojourner Truth, a Northern Slave*. [1850] Ed by William L. Andrews et. al. *Slave Narratives*. New York: Library of America, 2000. 567-676.
- Anderson, Lisa M. *Mammies No More: The Changing Image of Black Women on*

- Stage and Screen*. Lanham, MD: Rowman & Littlefield, 1997.
- 荒このみ『黒人のアメリカ：誕生の物語』ちくま新書, 1997
- Braxton, Joanne M. *Black Women Writing Autobiography: a Tradition within a Tradition*. Philadelphia: Temple UP, 1989.
- ブラウンミラー, スーザン (幾島幸子訳)『レイプ：踏みにじられた意思』[1975] 勁草書房, 2000
- Carby, Hazel V. *Reconstructing Womanhood: the Emergence of the Afro-American Women Novelist*. New York: Oxford UP, 1987.
- フリーダン, ベティ (三浦富美子訳)『増補 新しい女性の創造』[1963] 大和書房, 1977
- 福田千鶴子「フェミニズムの書としての奴隷体験記：ハリエット・ジェイコブズ『ある奴隷少女の人生に起きた出来事』」関口功教授退任記念論文編集委員会『アメリカ黒人文学とその周辺』鷹書房弓プレス, 1997: 210-14
- 風呂本惇子「ハリエット・ジェイコブズ：自画像とその周辺」『立命館大学産業社会論集：須田稔教授退任記念号』第33巻第1号(1997): 5-16
- Garfield, Deborah H. et. al. eds. *Harriet Jacobs and Incidents in the Life of a Slave Girl: New Critical Essays*. New York: Cambridge UP, 1996.
- ギディングス, ポーラ (河地和子訳)『アメリカ黒人女性解放史』[1984] 時事通信社, 1989
- フックス, ベル (清水久美訳)『ブラック・フェミニストの主張：周縁から中心へ』[1984] 勁草書房, 1997
- 岩本裕子「ブラック・フェミニズムの源流を探る：『黒人の声』誌(1904～07)を手がかりに」『女性学』第2号(1994): 173-79
- 『アメリカ黒人女性の歴史：20世紀初頭にみる「ウーマニスト」への軌跡』明石書店, 1997
- 『スクリーンに見る黒人女性』メタ・ブレーン, 1999
- James, Joy et al. eds. *The Black Feminist Reader*. Malden, MA: Blackwell, 2000.
- ジョーンズ, ジャクリン (風呂本惇子ほか訳)『愛と哀：アメリカ黒人女性労働史』[1984] 学藝書林, 1997
- 鄭 映恵「フェミニズムのなかのレイシズム：〈フェミニズム〉は誰のものか」江原由美子ほか編『ワードマップ フェミニズム』新曜社, 1997: 89-113
- 松本 昇ほか編『記憶のポリティックス：アメリカ文学における忘却と想起』南雲堂フェニックス, 2001
- 水田宗子『フェミニズムの彼方：女性表現の深層』講談社, 1991
- モリスン, トニ (大社淑子訳)『白さと想像力：アメリカ文学の黒人像』[1992] 朝日選書, 1994

- 岡 真理『思考のフロンティア 記憶／物語』岩波書店, 2000
- 大橋 稔「ローザ・パークス再考：アメリカ黒人女性史の試み」『かりん かりん：女性学・ジェンダー研究』第2号（2002）：3-23
- 「女性学の戦後：よりよく〈わたし〉を生きるために」大越愛子ほか編『戦後思想のポリティクス：戦後・暴力・ジェンダー1』青弓社, 2005：179-205
- パターソン, オルランド（奥田暁子訳）『世界の奴隷制の歴史』[1982] 明石書店, 2001
- 斎藤忠利「Sojourner Truth について」『日本女子大学紀要文学部』第40号（1991）：1-9
- Smith, Sidonie. et al. eds. *Women, Autobiography, Theory: a Reader*. Madison: U of Wisconsin P, 1998.
- Sterling, Dorothy. *Black Foremothers: Three Lives. 2nd Edition*. New York: Feminist P, 1988.
- 武田貴子ほか『アメリカ・フェミニズムのパイオニアたち：植民地時代から1920年代まで』彩流社, 2001
- 土田 宏「ある知識人とアメリカ南部：危機の時代におけるオルムステッドの南部観」『上智短期大学紀要』第11号（1991）：25-49
- Walker, Alice. *In Search of Our Mothers' Garden*. [1983] San Diego: Harvest, 1985.
- Yellin, Jean F. "Introduction." Harriet Jacobs. *Incidents in the Life of a Slave Girl: Written by Herself*. Ed by Jean F. Yellin. Cambridge, MA: Harvard UP, 2000: xv-xli.
- （和智綏子訳）「ハリエット・ジェイコブズの自伝」『RIM』第5巻第2号（2003）：13-26